青森県立郷土館研究紀要　第48号,15－16, 2024. 3

【資料紹介】外ヶ浜町大平山元Ⅱ遺跡の出土石器

齋藤　岳[1)]

Stone Tools from the Odai-Yamamoto-Ⅱ Site in Sotogahama Town

SAITO Takashi

キーワード：大平山元Ⅱ遺跡、旧石器時代、削片、石核調整剥片、石器接合資料

はじめに

外ヶ浜町大平山元Ⅱ遺跡の出土品は、当館所蔵の重要考古資料である。

1980 年に刊行された報告書の中には、写真のみ掲載の資料と表のみ記載の資料がある。本稿では写真のみ紹介の資料のうち２点、表のみ記載の３点を図化し、紹介する。他に写真図版 16-３の接合資料が写真で紹介されているが、同一母岩の剥片があり、さらに接合できる可能性がある。そのため来年度以降に紹介することとしたい。

１　大平山元Ⅱ遺跡の出土石器(図１)

図１－１(報告書「ナイフ形石器」)は、剥離面の新旧関係を観察した結果、正面左側上方からの剥離面が新しいと判断できたため彫器削片とした。大平山元Ⅱ遺跡からは、有樋尖頭器が盛行する時期と細石刃の時期の資料が多数出土している。いずれの時期にも彫器が伴い、有樋尖頭器製作時にも削片が発生する。

現存幅は 1.4cm と幅広であり、有樋尖頭器削片の可能性がより高いと考える。

図１－２～４は報告書第６図の石核接合資料 NO. ６と同一母岩である。NO. ６は、石核１点、石刃・縦長剥片９点、剥片６点の計 16 点の接合資料と同一母岩の石刃・縦長剥片６点からなる。接合点数が多いだけではなく、石核は両設打面で上下ともに打面再生を繰り返す。石刃・縦長剥片を生産するための手順をよく伝えており大平山元Ⅱ遺跡を代表する接合資料といえる。同じ D16 グリッドからの同一母岩の３点が石核調整剥片として報告書第６図内の表で計測値が記載されている。その３点を図化した。図１－２は正面右側に礫面が残り、切子打面となっている。図１－３は長さ 3.9cm と小形の剥片であるが、打面の幅は 1.3cm と厚く打面再生剥片の可能性がある。NO. ６は、礫面の残り方からみて、大きな原石を素材としている。図１－３が打面再生剥片とすれば、接合資料６と同一母岩で、分割された別個体があり、同一グリッド内で石核が小形になるまで剥片剥離が進行していたと考えられる。図１－４は剥片剥離軸がねじれた長さ 6.1cm の縦長剥片である。

写真図版 17-1 は、14 点(折れた部分を含めると 18 片)の剥片の接合資料である。正面側の一部に礫面が残る。形状から、尖頭器などの両面加工の石器製作時の調整剥片の接合資料と考えられる。

謝辞

重要考古資料として整理指導していただいた文化庁文化財第一課の今井哲哉調査官、ご教示をいただいた青森県教育庁文化財保護課の濱松優介文化財保護主査、外ヶ浜町教育委員会世界遺産室の駒田透室長補佐に感謝申し上げます。

引用参考文献

青森県立郷土館 1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第８集

表１　石器観察表

番号	報告書番号等	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	注記	備考
1	写真22-10、表5-ナ3	削片	(2.2)	(1.4)	(0.6)	(1.2)	D14ⅠS592	報告書「ナイフ形石器」
2	第6図表内22	剥片	2.5	2.6	0.8	3.8	D16ⅢS560	報告書「調整剥片」
3	第6図表内23	剥片	3.9	4.0	1.2	15.4	D16Ⅱ上S215	報告書「調整剥片」
4	第6図表内24	剥片	6.1	3.2	1.3	13.0	D16Ⅱ上S70	報告書「調整剥片」
5	写真図版17-1	接合資料	19.7	13.5	4.5	422.0	D17Ⅱ下S222・S504・S525・S530・S537・S553・S571・S588・S597・S599・S604・S640・S659・S662・S673・S705・S767・ⅡS16	剥片14点(18片)接合、石核無し

１）青森県立郷土館　学芸課副課長・副参事（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

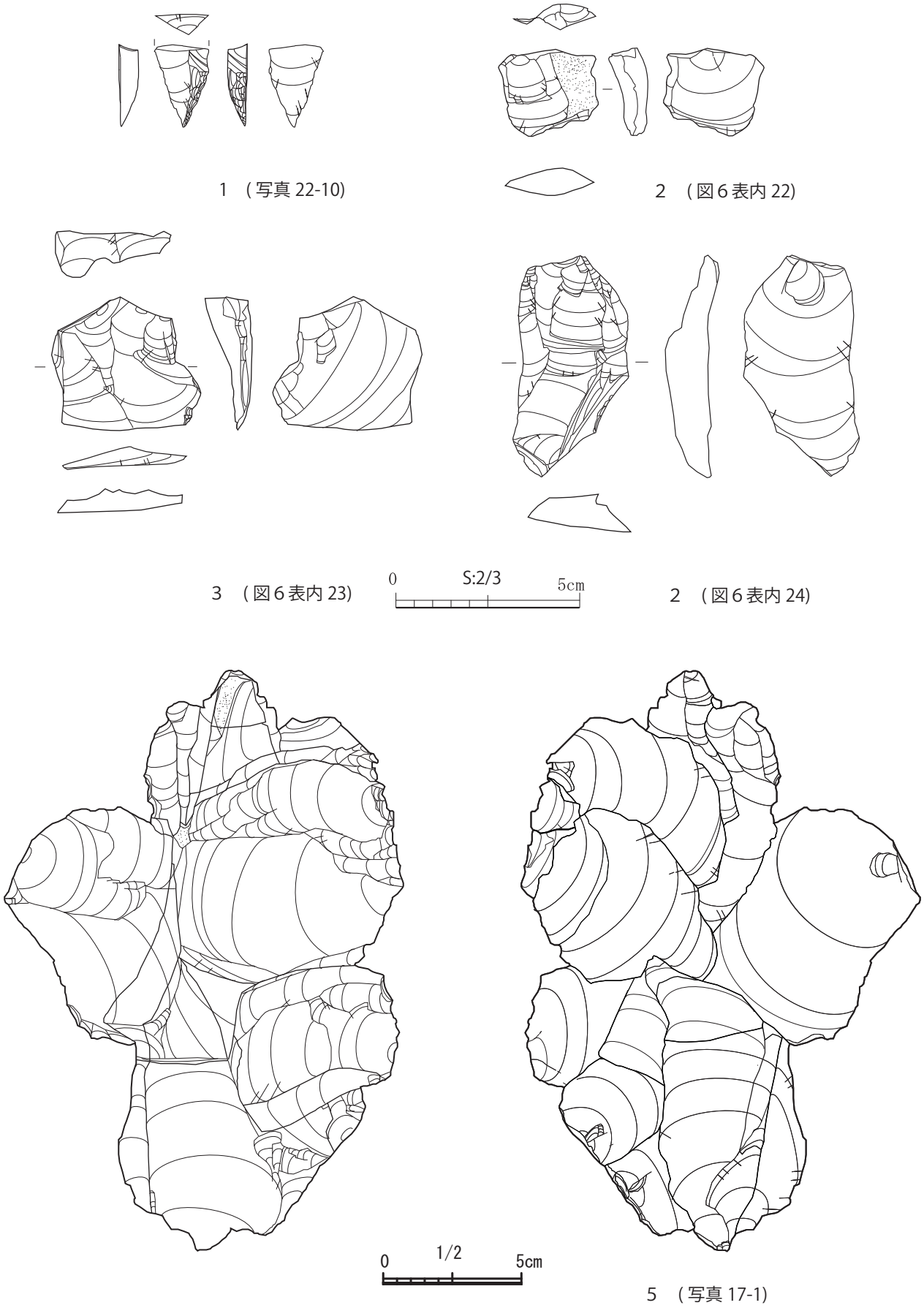

図１　大平山元Ⅱ遺跡出土石器